

エラスムスの*Problema* (1533) について

エラスムスの*Problema* (1533) について

木ノ脇 悅 郎

エラスムスがギリシャやローマの古典研究者として、原典の翻訳、註解を書いたり、更にそれを当時の人々に紹介するために出版したりしたことは良く知られている。代表的なものを列挙してみると次のようになる。

1506年、エウリピデースの*Hecuba*, *Iphigenia*, 1507年、キケロの*De officiis*、1512年、プルタルコスの*Opuscula*, 1513年、セネカの*Tragoediae*, 1516年、プリニウスの*Historia Naturalis*, さらには、カトー、ガレノス、オヴィディウス、クセノフォン、テレンティウス等々古典期の代表的な著作家を網羅しているといつても過言ではない。そして1531年にはアリストテレスの*Opera*(著作集) をも編集、出版しているのである。

今回ここに訳出を試みた対話作品、*Problema* (問題) はおそらく上記のアリストテレスの作品と密接な関係があると思われる。つまり、その編集した著作集第四巻に収められた『天界論』*De Coelo* からの引用と思われる表現が随所に見受けられるのである。⁽¹⁾それはアリストテレスの自然学がまだ有効性を持っており、人々の間で信頼を得ていたということの証左でもあろうがそのことについては詳論をする必要はあるまい。要は、エラスムスが自らの編集したアリストテレスの作品を自分の対話集の素材として取り入れたということである。

この対話でエラスムスが訴えようと試みていることは一体何であろうか。読み始めて、しばらくは、と言うよりも最後までその意図をはかりかねるのである。つまり最後の数行で罪の重さの問題が扱われ、最後の一章で「健全な洞察

エラスムスの*Problema* (1533) について

を少しでも持っているなら」 si vel micam sanae mentis haberemus, 罪の重荷を免れるための努力をするであろうと結んでおり、これがこの対話の中心的な主張であると思われるのだが、それにしては此処にいたるまでの対話は「重き、軽さ」の問題に集中している。我が国の落語であれば、重さについてのいろいろな見方を設定しておいて、最後に落ちを付けるといふいわば「仕込み落」という説明も付けられようが、エラスムスの場合どのように考えるべきか。ここでは、その話題が多くの人々の関心を引くものであり、エラスムスはそれを利用して全体を読ませ、最後に自分の主張を明らかにしようとしたという推測をしておくほうがよさそうである。

ところで、この作品は1533年3月に新たに出版された『対話集』最終版の二つの作品の一つである。他の一つは *Epicureus* という対話であり、その中で作者は古典的哲学の教えがキリスト教的洞察と結びついて豊かなものになることを主張しており、当時の人文学者達の代表的な見解を明らかにしていると思われる。その意味では、ここに訳出した対話も同一の線上で論じることが可能となるであろう。

対話を交わす人物の名前について、エラスムスは他の対話作品においても様々な工夫を凝らし、その対話の内容にふさわしい名を創出しているが、ここでもその手法が生きているといえる。つまり、主として質問をする人間を Curio と名付けているが、それはラテン語の *curiosus*, つまり「熱心な」、「知識欲旺盛な」、「好奇心に富んだ」というような意味の形容詞である。しかも対話の中で話者自身に言わせていることは、語尾の *sus* をとって欲しいということである。なぜならば、*sus* という語は豚を意味するからであり、豚は *curiosus* という内容とはおよそ釣り合わないからということであろう。

また、当時のバーゼルに実在した人物の名前でもあり、⁽²⁾ エラスムスは、親しみを込めて、いたずらっぽくその名を用いたのかもしれない。

翻訳のために用いたテキストは次のものである。

Erasti Opera Omnia, 1-3 Amsterdam (ASD 版), 1972 p. 713-719 また、本文の異同を見るためにライデン版全集 (LB 版) 第 1 卷をも参照した。

エラスムスの*Problema* (1533) について

本文中、話者の名前を Curio については Cu と、Alphius については Al というように略記した。

Curio, Alphius

Cu. ご面倒でなければ、何か多くの素晴らしいことをあなたから学べたらどんなにか嬉しいことでしょう

Al. いいとも、クリオ、何が知りたいのかね。言ってごらん、あなたの名前に相応しいように。⁽³⁾

Cu. 勿論、私はクリオと呼ばれることを苦にしてはおりませんが、ただ、ヴィーナスや同様にミネルヴァにも嫌われた単音節の動物を名前の語尾に付けてないようにして下さい。⁽⁴⁾

Al. 何を知りたいのか、言ってごらん。

Cu. 私たちが重いとか軽いとか呼んでいるものが何なのか知りたいのです。

Al. 同様に冷たいとか暖かいというのはどういう事かも訊ねたらどうかね。そんな問題は私よりもむしろ荷物運搬人に訊ねたらよからうし、あるいはお望みなら、荷物の重さを耳のたれ具合で示すロバにでも訊ねたらどうなんだ。⁽⁵⁾

Cu. 私が期待しているのは、そんな馬鹿なことではなく哲学的な答えなのですよ。アルフィウスからは特にそのような答えを期待しているのです。

Al. 重いというのは、それ自身の本性のゆえに下へと動かされることであり、軽いというのは同様に上へと動かされることなのだよ。

Cu. それでは、何故私たちの下にある反対側のものが天の下に落ちないのでしょうか。

Al. それは同じように、彼らもどうしてあなたが天の下に落ちないで立っているのか不思議がっているだろうさ。というのは、天はその内側に包み込んでいるすべてのものの上にあるのであって、反対側のものがあなたの下にあるわけではないんだよ。彼らは我々の反対側にいるのであって我々

エラスムスの*Problema* (1533) について

の下にいるというのではないんだな。そうでなければ、地球の反対側にある岩が落ちもせず、天を突き破ることもないのはどうしてなのか、もっと不思議なはずだろ。

Cu. それでは、重いものの本来のあり場所、又反対に軽いものの本来のあり場所はどういう事になりましょうか。

AI. 重いものは、すべてその本性的な運動によって地面に引き付けられるし、軽いものは空間に浮くということだ。今言っていることは強制的な、あるいは動物的な運動について言っているのではないんだよ。

Cu. では、動物的といわれるような別の種類の運動があるのですか。

AI. 勿論さ。

Cu. 一体どんなものなのでしょうか。

AI. それは身体の四つの位置にしたがってなされるものだな。つまり、前後、左右、そして円環運動のようなものさ。その運動は、最初と最後は速度を増すが、中ほどでは緩やかなものなんだよ。なぜなら、開始のときには力で弾みを加えるし、終りの頃になると動物が達すべき所に達しようとする願いが加わるからなんだ。

Cu. 他の動物に何が起こるかは存じませんが、私には女中がおりまして、彼女は仕事を始める前から疲れておりますし、仕事を終える前にはすっかり疲れ果ててしまっておりますが。⁽⁶⁾それはともかくとして、あなたが話しあじめた事に話を戻して下さい。

AI. 私が言おうとしているのは、重いものが下方へ動かされるのは自然の運動だということだよ。何か重いものがあると、それは、より早い運動によって地面に引き付けられるし、軽いものだと、非常に強い勢いで空中に引き上げられていくわけだ。反対に、始めにはより早いものが徐々にゆっくりしていくことが強制的な運動の中にはあるんだよ。自然的な運動では逆になるがね。例えば、矢は空中に放たれるし、岩は天から落下していくというようなことなんだ。

Cu. ところで、もっとも小さな蟻が巨大な球体を走り回り、どこにでも取り付

エラスムスの*Problema* (1533) について

いて、一つも落ちることがないように、人間も地球に分散しているのだと私は考えていました。

A1. それにはいくつかの理由があるんだ。地球の表面がなんだかでこぼこしたものだということもそうだし、それに、他のほとんどすべての虫がそうであるように、蟻の足にも何かザラザラしたものが付いているし、それに小さな身体の滑らかさもその理由なんだ。もしあなたがそれを信じないのなら、とても滑らかですべすべしたガラスの球体で試してみるといい。蟻が落ちないだけではなく、球体をその頂点まで歩いていくのを見ることが出来るから。

Cu. では、木製の球体に描かれた全地球を宇宙学者達がそうしたがっているように、何かの神が地球の真ん中に穴を開け、そこから地球の反対側まで真ん中を貫いて垂鉛を通したとします。それから、その穴に石を投げ入れたとすると、それは反対側に通り抜けるでしょうか。

A1. 地球の中心まで行って、すべての重いものはそこに止まることになるんだよ。

Cu. では、地球の反対側からも石を落としたとしたらどうなりますか。

A1. その時には、両方の石が真ん中あたりで出会って、二つともそこに止まる事になるね。

Cu. ほほう、では、自然的な運動は段々に力が加えられて大きくされていくとおっしゃったことが本当だとしますと、何も妨害するものがなければ、穴に投じられた石や鉛の球は運動の激しさのゆえに真ん中を突き抜けてしまうことになりますよね。すると、真ん中を通過することによって再び運動は力を回復することでしょうね。

A1. 鉛が溶けることもなく真ん中に達することなどありえないのだよ。ところが、もし石が強制的運動によって真ん中を通過すると、最初はゆっくり動かされ、力によって高く投げられた石が地上に戻ってくるのと同様に、真ん中に戻ってくることになるのさ。

Cu. しかし、自然の運動によって戻ってくるということは、強制的運動によっ

エラスムスの*Problema* (1533) について

て真ん中を通り過ぎてしましますよ。すると石は決して止まらないことになってしまいます。

AI. 通り過ぎたり戻ったりしても、その平衡が保たれ得るようになるときについに止ることになっているのだよ。

Cu. しかし、自然の中に隙間がないとすれば、その穴も当然、空気で満たされていることになりますね。

AI. 当然だな。

Cu. そういう訳で、本性的に重い物体が空気中にぶら下がっているということになるのですね。

AI. 鋼が空気中にぶら下がっているようなものさ。それは至る所で磁石によって平衡が保たれるのだから。ところで、全地が同じ仕方で多くの岩でいっぱいになってぶら下がっている場合に、一つの岩が中空にぶら下がっているとしても、なにも不思議はないだろう。

Cu. では、地球の中心はどこにあるのでしょうか。

AI. 円の中心はどこにあると思うね。

Cu. それは、丁度分かつことのできない点のようなものです。もし地球の中心がそんなに小さなものだとしたら、地球を貫いて穴を開ける人は誰でも中心を壊してしまうことになります。すると、それによって動かされるべき重さをも持たなくなってしまうでしょう。

AI. 何とまあ、うまく誤魔化したもんだ。

Cu. いや、お願ひですから怒らないで下さい。私の言うことはなんであれ、ただ学びたいという願いのゆえに言っていることなのですから。もし、地球の球体をそれ自体の中心を貫き通さないで、それを外れたとしたら、それも中心からはるかに離れてしまっているとお考え下さい。すると、投げられた石はどこへ運ばれるのでしょうか。

AI. それは穴を真っ直ぐに運ばれることはないね。むしろ真ん中に向かって真っ直ぐに行こうとするだろう。そのようにして、むしろ中央寄りに行くのだよ。もし中央が左に偏っているとすれば、左に偏って地球に制止してい

エラスムスの*Problema* (1533) について

ることになるわけだ。

Cu. それでは、身体を重く、あるいは軽くするのは何なのでしょうか。

Al. そのことに対しては、神がなぜ火をすべてのうちで最も軽く、空気をその次に軽くお造りになったのか、土を最も重く、その次に水を重く造られたのかということで答えることができるだろう。

Cu. それでは、どうして水の固まりである雲が空中にかかっているのでしょうか。

Al. それは、湿った木から激しい熱が湿気を奪い取って蒸気が出るように、太陽に近づけることで自然の熱を吸収するためだよ。

Cu. それでは、山が平地に時々落ちかかるように、全重量によって落下してしまうというのはなぜなのですか。

Al. 凝固と密度が重量を加えているのさ。ちょうど鉄の細長い薄板が水の表面に支えられてあるように、空气中に支えられているかのように見えるんだ。

Cu. それでは、本性的な火を持つものはすべて最も軽く、本性的な土を持つものはすべて最も重いものであるとお考えなのですね。

Al. まあ、当らずとも遠からずだな。⁽⁷⁾

Cu. それに、空気というものはそれぞれにみんな等しく軽いわけではありませんし、土がそれぞれにみんな等しく重いというわけでもありません。水についてもおそらくは同様に考えられる筈です。

Al. 驚くことはないのだよ。君が言っているのは純粋な元素のことではなくて、様々な元素からなっているもののことなのだから。だから、その土が最も軽いというのは、それがほとんど火や空気と混ざり合っているからであり、その水が最も重いというのは、おそらく重い土と混ざり合っているからなのだよ。つまり、海水が塩から出来ているようなものだと思うのだがね。全く同様に、水や土に最も近い空気はより重くなるし、土からはるかに遠く離れているものより軽いということはあり得ないのだよ。

Cu. では、石と鉛と比べるとどちらが土の本性を多く持っているでしょうか。

Al. それは石さ。

エラスムスの*Problema* (1533) について

Cu. しかし、比べてみれば鉛の方が石よりも重いではありませんか。

AI. その理由は密度の問題で、石は鉛よりも多くの空気を含んでいて密度が薄いのだよ。そのために、ある種の乾いた土を水の中に投げたとしても、それが沈まずに浮いているのを見ることさえ出来るのだ。同じ理由から我々は土地全体が浮いているのを見ることが出来る。というのは、根が中空になっている葦が沼の他の植物とつながって支えられているようのものなんだ。

Cu. 軽石が軽いのもそのためなのですね。

AI. 多くの隙間があるからな。それに、大きな火で気が抜けてしまっているのだよ。だから、それは焼けている場所で作られてくるわけさ。

Cu. コルクがあんなに軽いのはなぜでしょう。

AI. さっき言った通りで、目が粗いというのが原因なんだ。

Cu. 鉛と金とではどちらが重いのでしょうか。

AI. 金だと思うがね。

Cu. でも、金の方が火の本性を多く持っているように思えますか。

AI. それは、ピンダロスも言っているように、夜に火のように光るからというのだろう。

Cu. ええ、勿論です。

AI. しかし、密度は金の方が高いのだよ。

Cu. どうしてそれを見分けられるのですか。

AI. 金細工師が答えをくれるだろうさ。銀も、鉛も、銅もその外の同様な金属も、金ほど薄く広く槌で引き延ばされはしない。同じような理由で、哲学者達は蜂蜜や油ほど密度の高い液体は他にないということを見分けたのだね。もし、それを塗って広げてみると、液体はとても広く広げることが出来るし、とてもゆっくり乾いていくものなんだ。

Cu. 油と水はどちらが重いのでしょうか。

AI. 麻布を油に浸してごらん。油の方が重いと思うよ。

Cu. では、どうして油が水に浮くのですか。

エラスムスの*Problema* (1533) について

- AI. それは軽いからじゃないんだよ。油の持つ火の本性によるのだ。つまり、特にすべての油性というものは水と相容れない力を持っていて、それは「沈まないもの」*'ἀβαπτός'*と呼ばれる植物の中にあるんだよ。
- Cu. では、火で真っ赤に焼かれた鉄はどうして浮かないのでしょうか。
- AI. それが本性的な熱ではないからさ。そのために、大きな熱は対立する液体を追い払うけれども、一方では水を容易に入れることにもなるわけだ。こうして、鉄の楔は薄い板よりも容易に底の方へ急激に沈むことになる。
- Cu. 熱せられた鉄と冷たい鉄では、どちらが耐え難いでしょうか。
- AI. それは熱せられた方さ。
- Cu. だから、そちらの方が重いのですね。
- AI. そう、冷たい火打ち石よりも火のついた藁の方が手で運ぶのによりた易いというようなことはないだろう。
- Cu. 一つの木片が他の木片より軽かったり、重かったりする理由は何でしょうか。
- AI. それも密度と目の粗さによるのだな。
- Cu. ところで、私自身は英国王室のある人を知っていたのですが、その人が宴会の席で私たちに木片を見せ、それがアロエというものだとおっしゃいました。それは全く密度の高いものだったので石のようにさえ見えましたが、手で計ってみると大変に軽く、まるで葦のようにさえ思えたのです。むしろ、乾いた葦よりも軽くさえ思えたぐらいです。それをワインの中に入れると（そうすることで毒から守ると考えたからなのですが）すぐに、それは底の方に沈んでしまいましたし、ほとんど鉛よりも早く沈んでしまったのです。
- AI. いつでも密度と粗さだけが原因というわけではないからね。事物の中には特別な隠された原因で、それ自身引き付けられたり遠ざけたりすることが生じることもあるものさ。例えば、磁石が鋼を引き付けるとか、葡萄酒がキャベツを遠ざけるとか、炎が遠くからでも石油に飛びついたりすることがあるのさ。それがかなり低い所に在っても石油は本的に重く、炎は本

エラスムスの*Problema* (1533)について

性的に軽いからそうなるわけだ。

Cu. 銅貨はどんな種類でも水銀の上で浮きますね。ところが水銀はもっとも濃い液状であるというのに、金だけは固まって転げ回りますね。

AI. 自然の特別な関係という以外答えようがないね。というのは、水銀は金を洗浄する性格を持っているのだよ。

Cu. なぜ、アレトゥーサ河はシシリ一海の下を通っているのでしょうか。

どうしてその上を流れないのでしょうかね。あなたは、ついさっき海水は河の水よりも重いとおっしゃいましたね。

AI. 自然に反しているというのがその理由なのだが、それは神秘なんだ。

Cu. 同じ水に人間が入ると底まで沈んでしまうのに、どうして白鳥は浮いていられるのでしょうか。

AI. その理由はただ羽毛の隙間と軽さだけによるのではなく、水が嫌う乾燥という性質にもよるのだな。だから、もし極度に乾燥させた布切れの上に水やワインをこぼしても、玉になってしまうのだよ。もし湿った所に置けば、それはすぐに染み透ってしまうだろ。同様に、乾いた盃、あるいは周りに油を塗った盃に液体を注いでみたり、その盃が容れ得る以上の量を注いでも、液体はその縁を超えていくよりもむしろ真中あたりに丸くなって集まるわけだ。

Cu. では、船はなぜ海よりも川では小さな荷物しか運べないのでしょう。

AI. その訳は、川の水はもっと薄いからだな。同じ理由で、鳥は非常に薄い空気よりも濃い空気の中の方が容易にバランスを取れるのだよ。

Cu. どうして「泳ぐ人」flatae は沈まないのでしょうか。

AI. 皮膚が太陽で乾かされて軽くなっているし、それに、湿気を排除するからなのさ。

Cu. 固められた鉄は沈んでしまうというのに、どうして薄板に広げられた鉄は浮くのでしょうか。

AI. 乾燥によることもあるし、空気が水と薄板の間に満ちていることにもよるのだな。

エラスムスの*Problema* (1533) について

Cu. ところで、水と酒とはどちらが重いのでしょうか。

AI. 酒が水より軽いというようなことはないと思うがね。

Cu. それでは、居酒屋で酒を買った人が、どうして樽の底に酒の代わりに水があるのを見つけたりするのでしょうか。

AI. それはだな、酒にはある種の油性があり、それが水の液状を遠ざけるのさ。油以外の何物でもないんだよ。証拠ははっきりしている。つまり、酒が良質であればあるほど、それは水に混ざりにくくし、火を付けると激しく燃えるだろ。

Cu. では、死海ではどんな生きた動物の身体もなぜ沈まないのでしょう。

AI. 私が自然のあらゆる不思議について答えることなど出来ないことだよ。自然が我々を驚かせたい、そして知られたくない何らかの秘密を持っているからだろうさ。

Cu. 大きさが同じだとしたら、痩せた人間が肥った人間より重いというのはどうしてでしょうか。

AI. 骨の密度が肉よりも高くて、それで重いのだろうな。

Cu. 同じ人間が、重さを加えるはずの食事の後よりも空腹の時の方が重いというのはどうしてでしょう。

AI. 靈が飲食によって喜びを与えられ、それが身体に軽快さを加えるからな。だから、快活な人は悲しんでいる人よりも軽く、死人は生きている人よりもはるかに重いというわけだ。⁽⁸⁾

Cu. それによって、同じ人間が願う時に重くなったり、軽くなったりすることがあるのですね。

AI. 息をいっぱい吸い込んでいる時には軽くなるのだし、息を吐き出した時には重くなるからな。同様に、空気を入れられ、閉じられた袋は浮いているが、穴を開けられると沈んでしまうだろ。ところで、いつになつたらクリオは、その「なぜなぜ」と叫びたてることを止めるつもりかね。

Cu. もう少しだけ教えて下されば、もう止めます。天は重いでしょうかそれとも軽いでしょうか。

エラスムスの*Prolema* (1533) について

AI. 軽いかどうか、私にはわからないね。それが火の本性を持っているのであれば、たしかに重くはないだろうよ。

Cu. 「もし、天が墜落するならば如何」という古い諺はどういうことでしょうか。⁽⁹⁾

AI. 単純な古代人たちが、ホメロスに従って天は鉄でできていると信じたからなのさ。ところが、ホメロスが言ったのは鉄に似たような色についてであって重さについて言ったのではないんだよ。⁽¹⁰⁾ それはちょうど灰色にみえているものを「灰のようだ」というのと同じなんだ。

Cu. では、天は着色されているというのですか。

AI. 本当はそうではないのだが、中空の空気と水分のためにそのように見えるわけだよ。実際にはそのような変化が生じるのではないか、ちょうど太陽がある時は燃えているように、ある時は褐色になったり、ある時は白くなったりするように見えるのと同じなのだ。同様に虹も天で色づけされているのではなく湿気によるものなんだよ。

Cu. ところで、これが最後です。天より高いものは何もなく、それが地球を覆っているのだとあなたはお考えですか。

AI. そうだよ。

Cu. 地球の中心よりも深いものは何もありませんか。

AI. 当然。

Cu. では、事物のあらゆる種類の中で、何が一番重たいでしょうか。

AI. 金だと思っているがね。

Cu. その事については、私はあなたと全く違う考え方を持っています。

AI. では、何か金よりも重いものを知っているというのかね。

Cu. 知っていますとも。勿論、はるかに重いものです。

AI. それでは、かわりに教えてもらおうか。あなたは、私の知らないと考えているものを知っているそうだから。

Cu. 靈が天の最も高い所から冥府の底に落とすのはどのような火でしょうか。というのは、それは地球の中心に位置しているというのですから、同然す

エラスムスの*Prolema* (1533) について

べてのうちで最も重いものということになりますね。

AI. そうだな。でも、だからそれは何だというのかね。

Cu. ヴェルギリウスが「純粹な空気の炎」と呼んだ人間の魂をそこに沈めてしまうような「罪」ですよ。

AI. そういう哲学的な問題に移ろうと思うのだったら、それは、罪と比べれば金や鉛などは羽毛のように軽いものだと私も考えるね。

Cu. こんな重荷を負わされた人が天に昇るということがあり得るでしょうか。

AI. そんなことはあり得ないと思うよ。

Cu. ところで、競争やあるいは跳躍をしようとしている人は、その重荷が何であれそれを捨てるだけではなく、呼吸をいっぱい吸い込んで自分に軽快さを加えるものです。ところが、天で休息を得るためのこの競争や跳躍のために私達はあらゆる岩や鉛よりも重い不用な荷物を捨てようと努力することはありませんね。

AI. 健全な洞察を少しでも持っていれば、そうするのだろうがね。

エラスムスの*Problema* (1533) について

【注】

- (1) アリストテレス著作集はトマス・モアの息子、ジョン・モアにささげられており、エラスムスは1531年2月27日付で献辞を書いている (P. S. Allen, *Opus Epistolarum Erasmi*, Tom. IX, p. 133-140, Ep. 2432, 以下 EE. Tom. IX, p. 133-140, Ep. 2432のように略記する) その中で著作集全体の構成について述べ、第一巻が『論理学』に始まって、第四巻が自然学関係の作品に当たられており、そこに *De Coelo lib. quatuor* を見出すことが出来るのである。
- (2) Valentinus Curio (記録は1516-32まで) アルザスの人でフライブルク大学の学生として最初の記録が出てくる。1516年にバーゼルに移り、1519年から当地に永住した。そこで市民権を得、学術書を扱うようになり、特にギリシャ語レキシコンは、彼自身もギリシャ語の素養があったため自分で序文を書いたりしている。また印刷業をも手がけ、ギリシャ語関係の文法書、その他のパンフレット、ローマ教会への批判などが見られるが全体的に穏健であったという (ed. Peter G. Bietenholz, *Contemporaries of Erasmus; A Biographical Register of the Renaissance and Reformation*, Vol. 1, Univ. of Toronto Press, 1985 p. 371-72)
- (3) この台詞と次の台詞については最初の解説において論じたので参照のこと。
- (4) Sus Mineruvam という諺を指している。「豚がミネルヴァ女神を教える」という意味であり、自分が知りもしないことを他人に対して教えるという皮肉である。詳しくはエラスムスの『格言集』参照 (LB. Tom. II, p. 43, *Collected Works of Erasmus*, Vol. 31, Univ. of Toronto Press, 1982, p. 88-90、以下 CWE, Vol.31と略記する)
- (5) 「耳のたれ具合で」 demissis auriculis 重さを示すというのも『格言集』に採用された諺であり (LB. Tom. II, p. 1098)、エラスムスはこれをプラトンやプリニウスの用例から説明するが、要するに身体的な条件が精神に影響を与え、元氣がない時の様子を指す表現として用いている。
- (6) ここで、女中のことを持ち出しているのは、特定の女性について言及して

エラスムスの*Problema* (1533) について

いるものと思われる。つまりエラスムスをバーゼルで世話していた Margarete Büssulin のことであり、彼女については他の対話においても言及されており、特に1523年版に現れる *Convivium Poeticum* では話者の一人として登場している。(Peter G. Bietenholz, *ibid.* p. 237)

- (7) 本文は、*Haud procul abes a scopo.* であり、直訳すれば「要点からあまり遠く離れていない」ということである。エラスムス自身はこの言葉にまつわる諺を『格言集』に採用している(LB. Tom. II, p. 376において *Scopum attingere* を取り上げ、ルキアノスやディオゲネス、ピンダロスの用法を紹介している)
- (8) このような理解は、エラスムスの影響を強く受けたラブレーにも見られる。たとえば、『第四の書、パンタグリュエール物語』第六十五章、「パンタグリュエールが、その家臣たちと、晴天を希って酒を汲んだこと」の中に次のような台詞が見られる。

「我々は、食ったり飲んだりして、順風を希って前祝いをしたばかりか、船の積み荷をも非常に軽くしたわけだぞ。しかも、それは、アイソポスの籠が軽くなったという遣方、つまり、食糧を食い尽くすという遣方によつたばかりでなく、空腹から逃れ出るという遣方によって、そうなるのだ。その理由は、人間の体は、生きている時よりも死んでいる時のほうが重いのと同じく、断食した時の人間は、飲み且つ食った場合よりも、はるかに下界の重みがあって、ずっしりしているからだ。従って、長旅に出て、朝、飲み且つ食った人々が、「馬も、これで乗乗の調子で行くだろう」というのも見当違いでないのだ」云々」(渡辺一夫訳、岩波文庫、1975、292ページより引用)

- (9) 『格言集』にも採用されている諺 (LB, Tom. II, p. 207-8, CWE, Vol. 31, p. 442-443) エラスムスは、その説明の中でアリストテレスの『形而上学』第五巻、第二十三章を引き合いに出している。『形而上学』の本文は次のとおりである。

「あるいは詩人がアトラスをして天をたもたせているように、というのは、

エラスムスの*Prolema* (1533) について

そうでないと、或る自然学者たちも言っているように、天が地上にくずれ落ちるであろうからというのであった」(出隆訳、アリストテレス全集12『形而上学』岩波書店 1968 180ページより引用)

- (10) ホメロス『オデュッセイア』第十五書、329行にある次の言葉。
「あいつらの増上慢も乱暴さも、鋼鉄の天まで届いているのだ」(吳茂一訳、『オデュッセイア』下、岩波文庫 1977、87ページより引用)